

源氏物語千年記念第二回公演

おぼろつきよ

# 朧月夜



皆様、本日はお忙しい所、お越しいただき、まことにありがとうございます。前回夏公演に続き、今回は第二回、秋の公演です。それにしても、秋なのに「おぼろ」とは、春なタイトルでありすぎません。すべてアジサイとヒマワリとコスモスが同時に鑑賞できる全季節型大地北海道に生まれ育った大塚のせいです。

しかし、話の内容は秋にふさわしい？、失恋のオンパレードです。まずは、お話とヴァイオリンで奏でる曲をお楽しみください。  
あらすじと登場人物の一覧をこのパンフレットに記してありますので、もし、話が分かりにくくうだったら参照されるとよいかもしれません。また、古典に詳しい方は朗読を聞いて驚かれるかもしれません。そこで、私がどうという解釈でこの脚本を仕上げたかという話も書いておきます。

## 旅のご予定

- 本日のご旅程
- 奈良春日にて御集合
- 千八年に移動
- 京都へ移動
- 紅葉の賀（見学）
- 賢木（見学）
- お話など
- 花の宴（見学）
- ご休憩時間
- ごん狐



## あらすじ

### 紅葉の賀 源氏が語る藤壺の話

あらすじ  
源氏（私）は十二歳で元服（成人）した。亡くなった母に似ているという藤壺を源氏は子供の頃から慕ってきた。藤壺は桐壺帝の側室である。元服すると女の人の所へ出入りはできなくなるのを嘆く源氏。源氏十八歳の時、藤壺が病になり宮中から実家に里帰りしたのを幸いと、藤壺の実家に通い関係をもつ。その後も

### 賢木 藤壺が語る自身の話

藤壺（私）は源氏との間の不義の子供について、悩んでいた。帝のお世継ぎである息子が、実は帝の子でないことが知られると汚名になる。世間も、ラ

### 花の宴 朧月夜の物語

イバル弘微殿もあら捜しをしている。帝も亡くなってしまう。そんな時源氏がまた家にやってきた。源氏を冷たく突き放すが自分も失神してしまう。次の日、回復したら、まだ源氏が現れた。塗籠（ぬりごめ）という屋内の蔵に隠れていたのだ。優しくしながらも源氏を帰す。源氏がヤケを起すのも心配である。弘微殿もわずらわしいし、息子の安全のためにも出家を決意する。出家をして自由の身になると、源氏にも情けをかけるようになるのであった。

春。源氏が桜の宴の後にたまたま忍び込んだ弘微殿で源氏はかわいく歌う女、朧月夜に出会った。しかし、朧月夜は名前を名乗らなかつた。月夜は帝の婚約者（側室）に入ると。その後、扇の持ち主である朧月夜を源氏は捜し求めている。ひと月後の藤の宴に参加して、源氏は婦人の部屋の前をめぐり会話をし、朧月夜を探しあてる。朧月夜も積極的であり、二人の秘密の関係が続く。朧月夜は一方で朱雀帝の尚侍（ないしのかみ）となつて、婚約の段階を進んでい、帝も彼女を愛し始めていた。朧月夜が病気で里帰りしたときには、弘微殿の実家で逢引していた。ある雷の夜、父親がたまたま在宅していて、密会を

発見してしまう。話は弘微殿の女御に伝えられ、弘微殿の女御の怒りは心頭に発した。源氏は失脚するまえに自ら須磨に流れることを決める。

### ごん狐（新美南吉）

一九三二（昭和七）年発表の作品。南吉の初期の作品です。小学校の教科書にも多数採用される。中山というのは愛知県に実際にある地名。中山様も実在した。その子孫である中山ちぢさんという女医さんに南吉は恋愛をしていたようです。二十九で結核でなくなりますが。南吉が評価されるようになったのは戦後のことです。

ひとりぼっちのいたずら好きの子狐「ごん」といたずら相手の兵十。兵十のウナギをたべてしまうが、あとで兵十の母親が死んだことを知り、母のためのウナギだったことに気づく。償いのつもりで鯛屋から鯛を盗んで兵十の家に置くと兵十に疑いがかかってしまう。その反省から栗や松茸を置くようにする。兵十は不思議に思い加助に相談すると

## ガイドをご紹介します

### 大塚修司

札幌生まれだが関西生活が長い。中学生に古文をおもしろおかしく教えてきたつもりだが、センター試験の国語を解

### 境谷睦美

二歳よりヴァイオリンを始め、現在、多彩な演奏活動をしている。今回は独奏に挑戦。演出

と朗読にも生きる。一方、登山活動に命を燃やす。以上変な二人組みです。



加助は神様のしわざだと答える。ごんはそれを聞いて寂しくなる。次の日ごんが栗を持っていくところを兵十が気

づき、また悪戯をしにきたと  
思い、火縄銃に火薬を詰めるのであった。

# 登場人物

## 源氏（げんじ）

いわずと知れた源氏物語の主人公。よく「光源氏」というが「光」というのはあだ名です。源氏という名前の由来は、外国の占いで「すばらしい人物だが帝王になると国が乱れるかもしれない」と出たので、父桐壺帝がやや身分の低い姓である「源」の姓を贈ったのです。

プレイボーイで女好きであると思われるが（その通りだが）、それ以上に筆者紫式部は光り輝くほど素晴らしい人物であり、すべての女性の憧れの的であるとして描いています。捨てられることはいくらあっても捨てることにはない。性格的にはプライド高く面子をつぶされることは許さない。物語の完璧な主人公。紫式部の理想的主人公像でしょうか。狂言廻しの側面もあります。

## 藤壺（ふじつぼ）

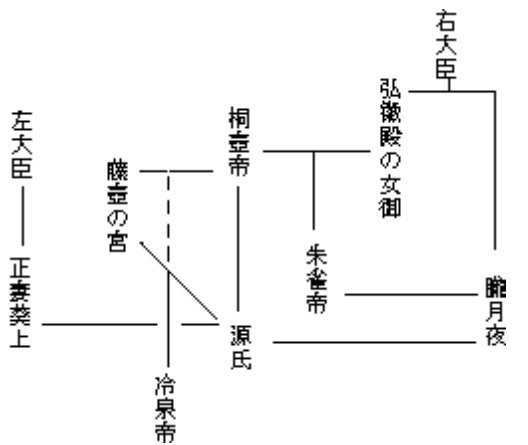
桐壺帝の側室のひとり。桐壺帝は側室の桐壺の更衣を偏愛したが、更衣は宮中のいじめに会って亡くなってしまふ。その更衣を忘れられない桐壺帝のために、更衣に似ていると言う人を側室に入れた。そ



## 弘徽殿（こきでん）の女御（にようご）

今回の物語の中での敵役です。右大臣家の中心人物で権力のある女性。右大臣自身より発言権がありそう。朧月夜は弘徽殿の女御の妹に当たる。実は桐壺帝の側室の第一位に当たるので権力も発言権もある。すでに皇位継承順位第一位の息子を産んでいる。桐壺帝が自分を差し置いて、桐壺の更衣を偏愛したりするのを許せない。また、その息子（源氏）が自分の息子より人気があるのを事あるたびに憤慨している。自分の息子が差し置かれて源氏が皇位継承をするのではないかと不安でもある。桐壺帝が藤壺を入内させると、矛先は藤壺にも向かう。息子は桐壺帝の死後、即位して「朱雀帝」となる。この朱雀帝に入内（じゅだい）することになっていたのが朧月夜。弘徽殿女御は朱雀帝の母なので、朱雀

れが藤壺の宮で、源氏より五歳だけ年上。源氏は藤壺が母に似ていると聞かされて育ったので、愛着もひとしおだった。藤壺と源氏の関係は原作では暗示だけされていて、具体的にどのような関係だったかわかりにくい。元服前にすでに肉関係があったようにもとれる描き方がされている。源氏の子供を生むことになるが、月数を偽って帝の子として二月遅れの出産をする。この子供が後の「冷泉帝」。息子の将来のために自らは出家して決着をつける。ヒロインとしては地味な人物かもしれないが、源氏の独白と対照的な面白さがあると思ったので取りあげた。



帝に対してもずけずけ発言している。

## 右大臣（うだいじん）

朧月夜の父。弘徽殿の女御の父。関西弁にしてみました。相当な権力者なのだから、もう少し重々しく行動するのが普通ですが、次のように描かれています。

のたまふけはひの、舌疾にあはつけき（軽口で軽平）を、大将（源氏）は、ものまぎれにも、左の大臣の御ありさま、ふと思し比べられて、たどしへなうぞ、はは笑まれたまふ。げに、入り果ててものたまへかしな。（御簾（みす）の中へきちんと入ってからおっしゃりたいのに）

この人は、弘徽殿の女御に朧月夜の密会を報告しに行きます。隠し立てのできない人



## 桐壺帝（きりつぼてい）

源氏の父。桐壺の更衣と桐壺帝の子供が源氏である。すでに、弘徽殿の女御との間に第一皇子（朱雀帝）がいる。桐壺の更衣を偏愛していたが、彼女が亡くなったために、そのあとで彼女に似ているという藤壺を側室として入内させた。弘徽殿側も重視するが、藤壺や源氏を本心では愛している。

## 朧月夜（おぼろつきよ）

弘徽殿の六番目の娘。気の強い女が多い？弘徽殿の家族の中ではおとなしい方に思われている。華やかであると書かれている。源氏物語の登場人物の中では恋愛に対してかなりの行動派、積極派です。藤壺と比べてもよく分かると思いますが、自分の境遇の受け止め方も、ほかの女性に比べると明快で、気持ちがいい。それで、今回の主人公として選びました。

## 朱雀帝（すざくてい）

桐壺帝の第一皇子で桐壺帝の後に即位。若い皇子である。側室に右大臣家から朧月夜が推薦されていて、朧月夜を尚侍（ななしのかみ）＝側室候補にする。やがて朧月夜を愛するようになる。朧月



夜と源氏が密会しているのは知っているし、自分より源氏に惹かれるのは当然だなあと思っている。強い母（弘徽殿）を持つたせい？弱気である。人生を悲観しており、すぐに自ら退位してしまうのである。

### 脚本（弁）解説

例によって弁解だか解説だかわからない、とりあえずワンプoint古文教室です。

古典に詳しい方は、今回の朗読を聞くと、多少の違和感を覚えるかもしれません。源氏物語に詳しい方はなお嘖然としたかも。そこで、私がいかにして、「古典の空気」を表し、「現代に通じる」ように源氏物語を解釈したかを弁解いや解説します。

### 紅葉の賀源氏が語る藤壺の話

藤壺の話は少しだけ変えています。藤壺と源氏の密会については、元服前にも関係があったようだし、里帰りしたときのこと、原文では詳しくは触れられていません。源氏の愛する女性なので、紫式部はぼやかしておきたかったのかもしれませんが、そのへんは想像してシナリオにしてみました。

源氏の藤壺への思慕は、随所に描かれています。たとえば、心のうちには、ただ藤壺の御ありさまを、類なしと思ひきこえて、さやうならむ入をこそ見ぬ。似る人なくもおはしけるかな。(桐壺)  
(訳) 源氏の心のうちには、

ただ藤壺のご様子が比べるものがないと思ひ申し上げられ、そのような人と結婚したい。他に似る人もなくいらつしやるなあ・・・

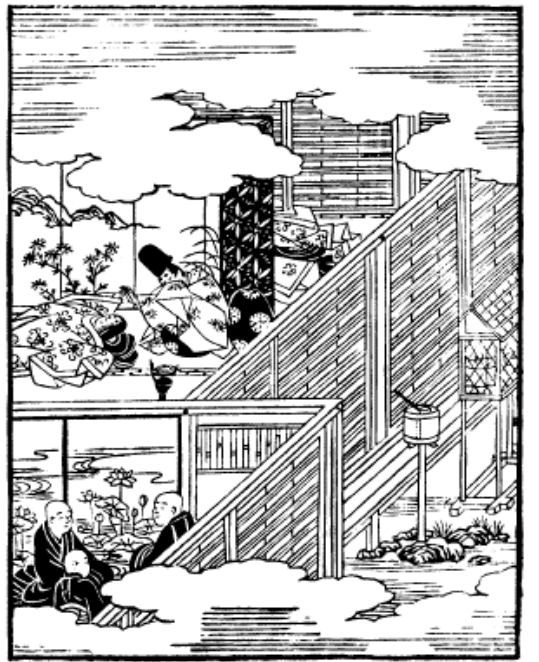
短編だと、恋愛の情熱がテーマになる傾向にあります。伊勢物語、曾根崎心中、タイタニック。しかし、源氏物語は必ずしもそうではない。紫式部は、恋愛の情熱面も描きましたが、醒めた視点やリアリティある感性もかなり持ち合わせています。平安の風俗や時代、人間関係を総動員して高みから自由に描いているように思います。源氏物語の一部を取り出して短編化するのには、面白さをそぐ面もあるかもしれません。

## 脚本弁解説

### 賢木 藤壺が語る自身の話

「疵(きず)を求める世間」について、藤壺は次のように言っています

宮の、御心の鬼にと若しく、「人の見たてまつるも、あやしかりつるほどのあやまりを、まさに人の思ひどがめじや。さらぬはななきことをだに、疵を求むる世に、いかなる名のつひに漏り出づべきにか」(紅葉賀)  
(訳) 藤壺の宮が心中の鬼(呵責)に苦しんで「女房たちが見てもおかしい誤り(妊娠)の月数のことかを、人が咎め



ないことがあるのか。ほんのつまらないことさえ、欠点を探す世の中に、どのような私の悪名が漏れてしまうかもしれない。』  
藤壺は終始この悩みで宮中をすごします。

「たてまつる」と謙譲語が使われているが、現代語に訳せない、身分をあらわす敬語の典型例。これがあるおかげで、主語が身分の低い女房などであることが分かる。

実は、藤壺の出家を決断する動機もそこにあります。原文では、

いとどしき世に、憂き名さへ漏り出でなむ。大后の、あるまじきことにてのたまふなる位をも去りなむ(賢木)

(訳) 一段とつらい世の中に、いやな評判まで漏れてしまふ。弘徽殿の太后(シナリオでは女御としてありますが)が「藤壺に適當でない身分」とおっしゃっているという私の位も去ってしまおう。

となりません。別に藤壺は自分のことを深く内省して、源氏への思いに気がついたとか、

どうも違和感があります。しかし、朱雀帝はまだ若く側室の話もでてこないし、しかも朧月夜を大変気に入っている。また、朧月夜も若いし最有力者の娘なので、「二人は、感覚的には「結婚」でいいのではないのでしょうか。

最初の出会いの場面は、原文では源氏がもう少しばかり乱暴でプレイボーイ風です。「朧月夜は(拒否する)強い心を知らないようだ」と書かれています。しかし、貴族の女の人

人は本人の意思より周りの意思が通りやすいとか、いきなり忍び込むという平安時代にありがちな感覚も、現代では、乱暴な印象が強くなりすぎます。朧月夜の積極的な面をあらわしたいので、少々現代風の女性にしてみました。それでもまだちよつとなあ、という気もしますが。

朧月夜については次のような描写がされています。

いと盛り、にぎははしきけはひしたまへる人の、すこしうち悩みて、瘦せ瘦せになりたまへるほど、いとをかしげなり。(賢木)

(訳) とても女盛りで、華やかな感じがなされる人が、すこし病気になるって、瘦せ瘦せになられたぐあい、とても惹かれる様子だ。

うっかり現代の意識で読んでしまえば、この時代は、瘦せているよりは太ったほうが美女美男でした。その意識に反して瘦せてしまったのになお魅力的だったというわけですね。そこで訳も反対

にしました。

「姉(弘徽殿の女御)が「父」より強いというのは、どう朗読で表現したらよいか。強いといえは母ですから、「姉」をやめて「母」にしていたらいいです。まあ、平安時代の男性の家庭での位置づけがそのまま伝わったほうが面白いかもしれない、正常な「姉」に戻してあります。

### その他

人名などは、原文では藤壺は「宮」朧月夜は「尚侍」源氏は「中将」などと、その時々々の役職で呼ばれています。「中将」といっても、頭の中將もあり、空蟬の召使の女房の中將もあって、古文読解は難しいのですが、文脈と敬語などで、どの人物が判別するわけですね。役職で人を呼ぶのは現在でも同じで、妻なのに「お母さん」と呼んだり、先生なら「先生」と呼んだりします。「社長」と

は呼べるが「大塚社長」とは呼びにくい、人名を直接言いきいのは日本の伝統とも言うべきなのかも知れません。そもそも、藤壺は部屋の名前、朧月夜は歌の歌詞で、作者紫式部はじめ後世の訳者が便宜上使った「あだ名」にすぎないといえます。



日本の古典の物語に登場する和歌は感動の中心といえます。朗読では、この和歌を多少オーバーに、拡大解釈もしています。

### 藤壺と源氏の歌

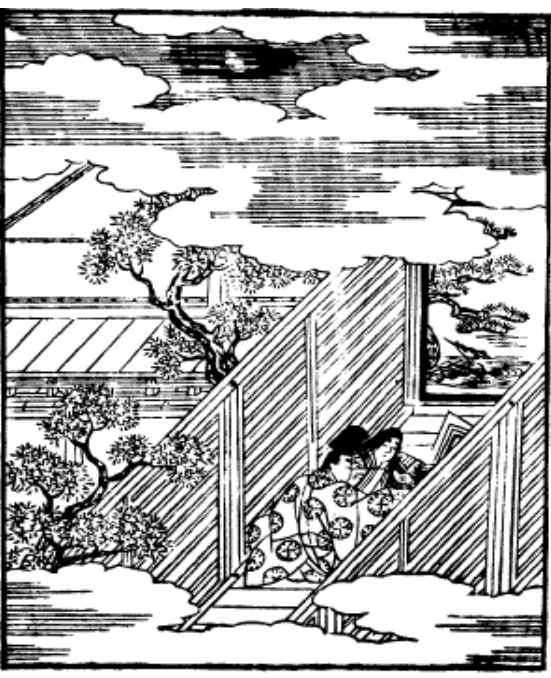
「見(み)てもまた 逢(あ)ふ夜 (よ)まれなる 夢(ゆめ)のうちに やがて紛(まぎ)るる 我(わ)が身(み)ともがな」

若葉巻後半に登場する歌「見る」は、普段は顔を見られない異性と交わる、見るは契ること。肉体関係を暗示する。「逢う」も愛情を持って会うこと。ここでは夢が実現する「合う」が掛詞になっていきます。「やがて」基本単語そのままに。「もがな」あつてほしい。状態にたいする希望を表す終助詞。

「世語(よがた)りに 人(ひと)や伝(つた)へむ たぐひなく 憂(うれ)しき身(み)を寔(まこと)めぬ 夢(ゆめ)になしても」

源氏が藤壺に逢って贈った歌です。「一度会ってもまた次は会う夜が稀でしょう。夢は実現しましたが、夢のうちに、そのまま紛れる私自身でありたい。」夢のようにほかない逢引をつらく思つて歌う歌です。

前の歌に対する藤壺の返歌。「世間の語りぐさに人が伝えるだろうか。類がない。つらい身の上を覚めない夢にしてしまつても」源氏の情熱的な歌に対して明らかに現実的な歌です。まず「人がどういふか」という上の句、「こんな例はない」と続き、源氏の「夢が叶つた」を切り返して、「私は夢にしてしまいたい」つまり現実になかったことにしてしまいたいと言っている。歌自体も



ストレートで修辭がなく、一生懸命詠んだ歌ではなく、つれない感じの歌です。しかし、一応返歌として歌っているのが藤壺らしいところで、優しい人柄を感じさせる。「人や伝へむ」疑問の「や」があるので「人が伝えるだろうか」と訳す。「たぐひなく」同じ種類であること、ならぶこと、連れ立つこと、兄弟仲間。たぐひないに比べると「憂(うれ)し」は思ふようにならずに辛い。無情だ。「ても」倒置になっています。「夢にしてしまつても、後世の人が語り伝えるだろうか」

## 和歌の解説

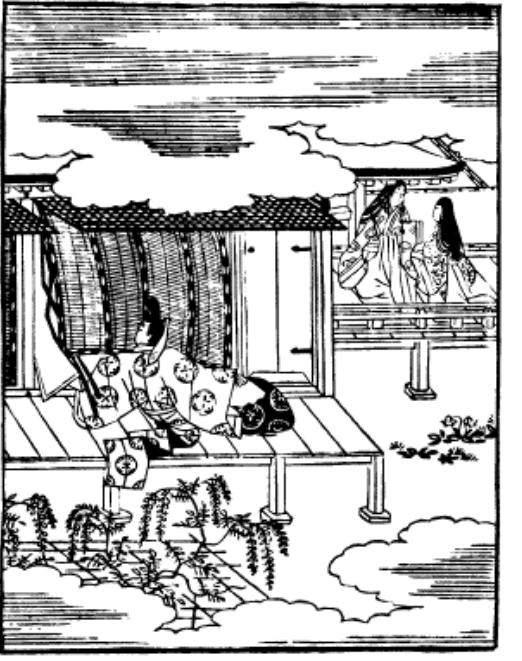
「もの思(おも)ふに 主(た)ち舞(ま)ぶべくも あらぬ身(み)の 袖(そで)うち振(ふ)りし 心(こころ)しりきや」

源氏が藤壺に贈った歌。紅葉の宴会で自分の踊りを見てくれたはずの藤壺に宴会の次の日贈った。「恋の物思いで、立つて舞を舞うこともできそうにない我が身ですが、袖を振ってあなたに知らせた私の心を知っていますか」「袖を振る」というのは、額田王の「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」の歌にあるように、恋愛感情を相手に伝えるという意味がありそうです。相手の魂を招き寄せる意味だそうです。せつなくて立っていられないくらいだと訴えています。

「唐(た)の国(くに)の 人(ひと)が袖(そで)を振(ふ)つた話(はなし)は遠(とほ)い昔(むかし)のこと(こと)で私(わたし)は疎(とほ)いですが、あなた(あなた)の立ち居(たちゐ)るまゝは素晴(すはら)しいと見(み)ました。」この歌も、源氏の情熱的な歌に対して、「遠い話だ」「すばらしいとは思つた」と限定的な感じの返歌になっています。おまけに、源氏が「立ち舞うことができないほどせつない」と言っているのを完璧に無視しています。それでも源氏はこの藤壺の返歌をお経のように大切に持っていたのでした。

「長(なが)き世(よ)の 恨(うら)みを人(ひと)に 残(のこ)しても かつは心(こころ)を あだ(あだ)と知ら(し)らむむ」

藤壺が塗籠から出てきた源氏に詠んだ歌。朗読では省略



えています。自分は以前朧月夜を見失ってしまったので以来、迷つて探し求めています。以前の人、朧月夜の影が見えるだろうか。

「梓(す)は枕詞。弓は射るので次の「いる」にかかる。特定の語にかかる枕詞ではなく連想で掛かる。

「心(こころ)いる 方(かた)なをらませば 弓(ゆみ)は(は)り月(つき)なき空(そら)に 速(はや)はましやは」

「世(よ)に知(し)らぬ 心地(こころ)こち(こ)こそすれ 有明(ありあけ)の 月(つき)のゆくへを 空(そら)にまがへて」

源氏が朧月夜を思つて一人で歌い、扇に書く詩。「いままで知らなかった心地がすることだ。有明の月のゆくえを空に紛れさせてしまつて。」月

「世(よ)に知(し)らぬ 心地(こころ)こち(こ)こそすれ 有明(ありあけ)の 月(つき)のゆくへを 空(そら)にまがへて」

花の宴の終わりに直前の歌。源氏が朧月夜を探し当てるために、御簾の外側で歌った。「月が入る山で迷っています。以前ちらつと見た月の光が見えるかと」月を朧月夜にたと

「世(よ)に知(し)らぬ 心地(こころ)こち(こ)こそすれ 有明(ありあけ)の 月(つき)のゆくへを 空(そら)にまがへて」

花の宴の中程にある歌。「世」は生、世の中、男女の仲。ここでは源氏の歌の「幾世」に於いて転生する人生のこと。源氏の「あだ(徒)」は「一時」だ。実がない。はかない、誠実でない、無駄。反対語は「まめ(忠・実)」「なむ」未然形につく終助詞、相手にあつらえ望む「してほしい」「はや」。「したい」とセットで覚えましょう。つかないこと。

「世(よ)に知(し)らぬ 心地(こころ)こち(こ)こそすれ 有明(ありあけ)の 月(つき)のゆくへを 空(そら)にまがへて」

源氏が朧月夜を思つて一人で歌い、扇に書く詩。「いままで知らなかった心地がすることだ。有明の月のゆくえを空に紛れさせてしまつて。」月

「世(よ)に知(し)らぬ 心地(こころ)こち(こ)こそすれ 有明(ありあけ)の 月(つき)のゆくへを 空(そら)にまがへて」

花の宴の終わりに直前の歌。源氏が朧月夜を探し当てるために、御簾の外側で歌った。「月が入る山で迷っています。以前ちらつと見た月の光が見えるかと」月を朧月夜にたと

「世(よ)に知(し)らぬ 心地(こころ)こち(こ)こそすれ 有明(ありあけ)の 月(つき)のゆくへを 空(そら)にまがへて」

花の宴の中程にある歌。「世」は生、世の中、男女の仲。ここでは源氏の歌の「幾世」に於いて転生する人生のこと。源氏の「あだ(徒)」は「一時」だ。実がない。はかない、誠実でない、無駄。反対語は「まめ(忠・実)」「なむ」未然形につく終助詞、相手にあつらえ望む「してほしい」「はや」。「したい」とセットで覚えましょう。つかないこと。

